

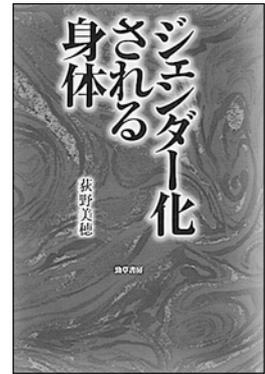
〈書評〉

荻野 美穂 著

『ジェンダー化される身体』

(勁草書房 2002年 xii, 376頁, 40頁 ISBN 4-326-65264-0 3,800円)

久保田 育子



「ジェンダー化された身体」——著者は、〈女〉および〈男〉という性の違いが所与の大前提として設定された文化の中で、訓育され、立ち上げられ、生きられる身体をこう呼ぶ。本書は、著者が1980年代後半より十余年に渡って、〈女〉という性差を組み込んだ身体がどのように構築され、社会の中でどのように機能してきたかを一貫して追求してきた過程における、ジェンダー化された身体の歴史に関する論考を集めたものである。

本書の構成は、新たに書き下ろされた序章を付し、三部からなっているが、はじめにその主要な論点を概観してみたい。第一部は、ジェンダー化された身体の歴史を考えるための著者なりの思考枠組と方法論に相当する論考を集めている。ここでは歴史における主体行為者としての女性の発見につながる作業の出発点としての身体感覚にまつわる問題点が指摘され、避妊と墮胎が取り上げられている。著者は身体を歴史的に見る作業に取りかかる際の問題点を、18世紀初頭のドイツのある街の医者とその女性患者たちが自分たちの身体をどのように体験していたかを読み解いたバーバラ・ドゥーデンの論考をもとに考察し、身体を解剖学的な臓器の集合体と見る西欧近代医学によって形成された身体感覚を自明視することの危険性を指摘している。そして、まず研究者自らが自分の身体を歴史化し、対象化する作業を行なうべきであると主張している。

第二部では、性差や身体は当事者により、あるいは他者による客体として、どのように定義されてきたか、またそこで定義をめぐるどのような争いや変容が見られたかを、主にイギリスにおけるヴィクトリア女王の治世期に確立した近代的身体観の検討をとおして検証するとともに、その基盤となった科学的性差論が、近代化に向かうこの時期の社会のありようと共振する様を描き出している。

古代ギリシアのアリストテレス以来、前近代に至るまで、男女の性差の境界は解剖学的な差異ではなく程度の違いにあり、性差は同一種内での序列であり、上下関係であった。すなわち、人間には一つの性しか存在せず、女性は生殖力のない不完全な男性とされてきたのである。現在、私たちが科学的な真実として信じている解剖学的性差論は、西洋においてわずか数百年ほど前に確立したものであり、西洋化が世界に拡大する過程で普遍的になったに過ぎない。ダーウィンやスペンサーなどによる男女の根本的な非相似性を指標として性を二大別するというこのような性差観は、解剖学や発生学などが立証した「科学的」根拠を土台にして、男女間の著しい非対称性や不均衡を強調することになり、その結果、男性には放縦、女性には貞淑という異なる性規範をふりあてる性のダブル・スタンダードが形成された。

国家の覇権の国外への拡大を図る帝国主義の時代にあって、女性の身体は国富の源泉たる人的資源の再生産装置としてその役割が認識され、「子宮は民族にとって、個人にとっての心臓のようなものであ

り、種の循環器官」であると位置づけられた。女性の正しい生き方は、その母性役割遂行を基軸に規範化され、それを妨げるものは、ヒステリーとして逸脱の烙印を押されて周縁化された。フーコーが「女の身体のヒステリー化」と呼んだ女性の全存在の性への還元を、著者は女性の「性器化」現象と名づけ、こうした女性の身体モデルが、西欧近代化社会を構成する基本的要件の一つである性別領域概念を支える論理的基盤として、今日に至るまでなおその有効性を失っていないことに注意を促している。

第三部には、ジェンダーについてのある規範的な文脈のもとで、実際に身体はどのように生きられたか、規範への適応や逸脱はどのようなかたちで起きたのかを示す事例的研究が収められている。著者はまず、キリスト教世界における子殺しという選別と排除の歴史を振り返り、子殺しを男性にとっても女性にとっても生殖行動の重要な一側面であると位置づけている。次に、性のダブルスタンダード、および「家庭の天使」と「娼婦」という女性像の二極化を生んだヴィクトリア期のロンドンにおける娼婦の姿には、中産階級の不安や恐れ、あるべき女性像への期待が投影されていることを、性病の蔓延を防ぐために売春婦の検査を義務付けたCD法（あるいは接触感染症法）とその撤廃運動を通して読み解いている。

以上の三部は、著者の研究の軌跡の記録としての意味からも、発表時からの修正は最小限にとどめられ、そこには十余年の間に内外で発表された新たな研究成果は反映されていない。そこで、ポスト構造主義的ジェンダー理論に対する著者の評価と、性差を持つ身体の構築についての現時点での著者の考えと立場性を述べているのが、序章である。

ジュディス・バトラーに代表されるポスト構造主義的ジェンダー理論においては、異性愛体制の内部で言語を本質的構成要素として身体を構築する時、「物質的」性差としてのセックスを持つものとして「セックス化された」身体が産み出されるが、この身体は生身の女性の「生きられた身体の実験」と乖離するものであるとして、著者はその身体論への疑問を投げかけている。異性愛体制における〈女〉の身体の追求を自らの立場性とする著者は、性差を持つ身体の考察において、身体に有機体としての物質性を取り戻すという方向性を提示し、その重要性を強調している。しかし、著者が男／女をファロスの有無という分割線の両側に配置させられた別個の実体とする性別二元論の中の女性の身体を論ずるのであれば、その身体を措定している男性の身体については、本書の第3章と6章で触れているとはいえ、さらに踏み込んだ考察を求めたい。

出産ばかりでなく、墮胎／中絶や子殺し、子捨てといった「産むことの否定」でさえ、それが生起する場の政治的状況や権力関係を無視しては、その意味を解釈することはできないと主張する著者は、物質としての生身の肉体という視角から女性の性とその身体の外を論じ、多様な社会実践の具体的痕跡に新たな光を当ててきた。幸福な恋愛とその成就是、結婚という共同体の再生産システムの中に身体を融解させるものであるが、このシステムの中では「産むことの否定」もまた身体の社会的馴致の一環ですらあるのだということを示した著者の功績は大きい。

性を論じる際に、身体のトポスは逃れ得ないものとしてつきまとう。複雑な社会的・文化的な差異の磁場として作用するテキスト化された理論上の身体と、テキストの枠組を越えて機能する有機体としての身体。評者は性を持つ身体を考える場において、この二つの身体は別個のものとして存在するのではなく、相互補完的なものとしてとらえる視点が不可欠であると考え。現在、トランスジェンダーや性同一性障害をはじめとする性と身体をめぐる多様な現象の可視化が、既存の様々な分割線の自明性を大きく揺るがしつつある。このような性差を越えた生身の身体の可視化は、テキスト化され、外部化され

た身体と向き合うことで、性の連続性や相互浸透性を照射することができた。さらには、最近の生殖テクノロジーの革新による性を介さない生殖の出現は、性別二元論の要諦そのものに決定的な変革を迫り、私たちを未知の身体状況に導いて行く可能性をもつものである。私たちは、著者が示したジェンダー化された身体が今後どのような変容を見せるのか、さらなる分析を待ちたい。

(くぼた・いくこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)